

院の一階は牛舎があり牛のにおいに満ちていました。銀座と医院と牛舎と言う不思議な取り合わせです。国道43号線は都市計画決定から着工まで、およそ十数年かかりました。着工まで用地はあちこちが広っぱとなっていました。深江銀座通りの南にも道路用地になる前には牧場がありました。南北五〇〇、東西一〇〇ほどであったでしょう。この牧場では、牛たちがのんびり日を浴びて寝そべったり草を食んだりしていました。「内海の牧場」と呼ばれていました。寝そべっている牛の尻尾に触っていたずらをした「悪ガキ」たちに、牛が怒って立ち上がったそうです。

この牛舎で子牛が生まれたとき近所の人には、その子牛がオスかメスかすぐに分かったそうです。大人の牛のなき声で分かるのです。オスの子牛は生後十日の経たないうちにどこかに売られていきます。子牛を引き離された母牛は声を上げます。母牛だけではありません。一緒にいる牛たちがみんな声を上げるのです。人間にもその牛たちの声が、悲痛な泣き声である事は分かったと言います。その牛たちの声を聞く子どもたちは、子ども心に「命」とか「親子の絆」とかを言葉ではなく肌で感じたのです。

終わりに

昭和二十年からの十年間は、わが国にとって歴史上まれに見る激動の時代でした。それはこの深江の町にとっても例外ではありませんでした。あれから六十年余の歳月が過ぎました。深江の長い歴史から見れば、六十余年前は「ちょっと昔」のことかもしれません。一方で、そのちよつと昔のことも、実際に見聞きし体験しかつそれを語れる人は、年々少なくなってきました。あらためて記録することの大切さを痛感します。

この文章は、メンバーで語りあったことや筆者の記憶を下敷きに、筆者の責任で文章にし、メンバーや志井保治会長にも見ていただき

修正を加えました。記憶違いもあるかも知れません。誤りがあれば指摘していただきたいと思います。今後ともテーマを変えて記憶の掘り起こしと記録を続けていきたいと思います。ご協力お願いします。



多田ラジオ店を経営していた多田正市氏、多田康治氏、元丸岡靴店の丸岡良一氏にも協力を得て、写真の年代特定をし、一部修正を加えました。多田ラジオ店の看板は、写真4は洗濯機が描かれています。写真5になるとテレビに変わり、わずかな時期に電化製品への憧れが変わり、それが看板にまで敏感に反映しています。また昭和四十年代になると、ぎんざの看板も様変わりし、コカ・コーラの広告が入ります。ここにも生活文化の変化が読み取れます。

なお原稿化に先立って意見を交わした深江塾のメンバーは、筆者の森口氏のほか、飯田一雄、植田延生、大西令子、寺田喜多子、西土井敏、畠信也、藤本吉江、増田行雄、三枝照於、山口咲子、吉田修三の各氏と史料館の道谷副館長、水口研究員と史料館長です。協力いただいた方に、末筆ながら厚く感謝いたします（大國正美）。

東灘区制六〇周年写真展に協力

甲南本通商店街振興組合が商店街の空き店舗を使い、二〇一〇年七月、東灘区制施行六十周年を記念パネル展「東灘のあゆみ」を開き、史料館も神戸高等商船学校の写真を貸し出すなど協力した。展示コンセプトの提案や、資料写真を検索するなど、最初から企画にかかわった。展示は一九三八年の阪神大水害の写真や新聞記事のパネル、東灘区の航空写真記事など約三〇点を展示した。

（大國正美）